

第4回学術集会放射線治療看護交流会 後記

——放射線性皮膚炎への取り組み——

The 4th Annual Meeting of the Radiological Nursing Society of Japan: Postscript of radiotherapy nursing exchange meeting “management of radiation dermatitis”

北爪 麻紀

Maki KITAZUME

東邦大学医療センター大森病院

Toho University Omori Medical Center

学術集会初日の午後より行われた放射線治療看護交流会は、「放射線性皮膚炎」をテーマに私がお話しした「放射線性皮膚炎に対する取り組み」とメディポリス国際陽子線治療センター向吉さんの「チームで取り組む放射線性皮膚炎」の二本立てでした。

放射線性皮膚炎を悪化させないためには、皮膚の「保清・保湿・保護」が基本ケアです。看護は、治療を受ける患者さんが「これなら『できる、やってみよう』という気持ちになる」ためにどのような情報を提供すればセルフケアが実現するか、という視点が重要だと実感しています。すると「セルフケア」は「指導」の姿勢ではなく、「支援」の視点で患者さんと向き合うことが出発点となります。視点を換え、科学的根拠を土台にして発想豊かに、個々の患者さんに合った具体的で実現可能な実践をすることに私は看護の醍醐味を感じています。今回の交流会で私は喉頭がんに対する分子標的薬を併用した強度変調放射線治療の症例で、皮膚炎の経過の画像と共に、「保清・保湿・保護」の具体的な工夫についてお話ししました。実際には、気管カニューレ留置部を含む治療計画でしたから、頸部の洗浄・皮膚保護の工夫と病棟スタッフとの情報共有が大切でした。皮膚炎のケアで難渋した経験でしたが、参加者の皆さんと看護の醍醐味を共有したいと思いこの内容にしました。そして、講演終了後に参加者から「処置方法を悩むこともあるが、私達にできることがあることに気がついた」など大変うれしいご意見をいただきました。

後半は向吉さんからのご発表でした。施設内における評価基準の統一化の整備を目的に、放射線性皮膚炎の写真100枚をCTCAEv4.0に基づき医師と共同し評価分類し、その画像を用いた学習ソフト作製の報告がされました。このソフトは、各自の学習にとどまらず、実際の患者さんの皮膚炎の評価に迷った際はいつでも照会、確認することができる点が優れていました。また、皮膚マーキングの保護目的で使用していたフィルムドレッシング材の貼付部分の皮膚反応が、周囲の皮膚と違うという気づきから、陽子線におけるフィルムドレッシング材使用の有無による皮膚炎反応の違いの研究を進めておられると大変興味深い報告がされ、今後の研究結果が楽しみです。

最後に座長の淡河先生から「放射線皮膚ケアは、看護師さんたちにどれだけ頑張っていたかにかかっている」と、私たちの看護実践への期待とその看護の質を高く評価していただけるお言葉を頂戴し、翌日からの看護実践への力を得た参加者は多かったと思います。

大変充実した交流会で、今回、このような学術集会での講演の機会をいただきましたことに感謝いたします。